

研究ノート

母娘関係の臨床心理学的研究の展開 I

— 主に分析心理学の観点から —

高 石 浩 一

1-1. 母娘関係の発見

Rousseau (1762/1962) が『エミール』において「子ども」を発見したように、母娘関係もア・プリオリに存在するものではなく、発見されねばならなかった。確かに原初から母が子を産み、それが娘であったなら、母娘関係は最初から確かにそこにあったが、改めて母が娘を育てること、娘が母になる（あるいはならない）ことを意識化したとき、それは多くの主題をはらむようになる。この点について、最も高らかな宣言は、恐らく Beauvoir (1949/2001) の『第二の性』における体験編第一章冒頭の「人は女に生まれるのではない、女になるのだ」という一文であろう。

Beauvoir は言う。「原始遊牧民には子孫への関心がほとんどなかった。」したがって「女は子どもを産んでも創造の誇りを知らない。」つまり「出産や授乳は生産活動ではない、それは自然的な機能である。」要するに「女は自分の生物学的運命に受動的に従うだけなのだ。」自虐的なこの表現は、実存主義者として、男と同じように自らを投企できない「第二の性」に甘んじざるを得ない女の呪詛が込められているように思われる。

続けて彼女は Bachofen (1861) が『母権制』を著し、「父権制（家父長制）社会より前に母権制（家母長制）が存在した」と主張する。そこではすべてを生み出す「大母」がイシュタル、

アスタルテ、ガイア、イシスといった各地の女神として現われるが、しかしながら「＜大地＞、＜母＞、＜女神＞である女は、男にとって同類ではなかった。女の機能が確立されたのは、人間とは別のところ（人間の社会ではなく、神の領域；著者注）においてである」と述べている。

「女性崇拜は、農業の時代、すなわち抗しがたい時間の持続、偶発性、偶然、待機、神秘の時代に結びついていた」と Beauvoir は言う。しかし人間は水路を引き、道を作り、作物を育て、微力ながらも自然を支配し始める。こうして「男は、想像力、明晰、知性、秩序などの男性的要素を至上のものと認める」ようになり、「母なる女神のかたわらに、息子あるいは恋人として男神が出現する。」やがて男神（ホルス、アドニス、ゼウス、太陽神ラーなど）は、世界を支配し、母権制にとって代わって以降、家父長制が幅を利かせることになる。

河合 (2000) は、同様の趣旨を独自の仕方ですべて述べている。まず彼は 1. 母権制、2. 母系制、3. 母性心理を区別して捉え、「母権制は母親が権力を持つこと、母系制は母—娘の系列によって家族を継承していくこと」、そうして「切る」「切断する」父性原理に対して、「育て慈しむ」と同時に「呑み込む」側面を持つ心の在り方を「母性原理」という形で定義し、「我が国は母権から父権、父系の制度へと変わってきながら、現代に至るまで母性心理を保持しているところに特徴を持っている」としている。河合のこの見

解については後述するとして、原始時代の捉え方として「完全な母権の時代は、母権、母系、母性心理は一体となって機能していた」が、「まず大切なのは偉大な母であり、それがすべてであった」としている。ただし、「偉大なる母は不変ながら、人間としては母→娘という継承がなければならない。」「ここで母娘一体感が強調されると、そこには変化というものが無い。」「母娘一体感を破らないと、変化は生じない。そこでだんだんと家族制度が変わり、『文明』というものが生まれてくる。男という存在が徐々に前面に出てくるのである。そのためにいろいろと制度を定め、それなりの『秩序』をつくることによって母娘一体感を壊していく」としている。河合のこの記述は、上述の「母系制にとって代わって以降、家父長制が幅を利かせることになる」という Beauvoir の歴史観と共通した側面を持っている。

もっとも、昨今の人類学的な視点からは、母系制はともかく、少なくとも母権制社会が父権制に先行するという Bachofen の主張は、地域差、婚姻制度、所有等をめぐる政治経済制度などの観点から疑問視されており、上記のような単純な進化主義は批判されている¹⁾。それでも、母から娘へという母系制は（男性が実質的な支配権や家督相続の差配を振るったとしても）、主に農耕文化において連綿と維持された時代があったことは一応の定説となっているようである。

いずれにしてもここで重要なことは、歴史的に見て母→娘の系列を軸とする母系制がまず出現し、Beauvoir の言うように都市化や人工化によるにせよ、あるいは人類学で言われているように父権的な狩猟・遊牧文化による母系制の農耕文化の凌駕によるにせよ、父権的な家父長制が母系制社会の後に出現したとされる歴史観の出現であり、それによって母娘関係が、いわ

ば「自然」に継承される自明の事態ではなく、まさに「女に生まれるのではない、女になるのだ」と宣言する時代が到来する素地を用意した、ということである。本論冒頭に掲げた Rousseau が、出生時から大人の人間になる過渡的段階において「子ども」を発見したことで、「教育」という人工的な営みの必要性が高唱されるようになったのと同じように、Beauvoir のこの宣言によって、母系制社会において「自然的な機能」でしかなかった出産や授乳、子育てという営みが、改めて後に「母親業」（Chodorau；1978）と呼ばれるような、さらには生殖補助医療や育児といった人工的な営みとして議論される素地が出来上がったということを見ると、まさに母娘関係は、Beauvoir によって発見されたといえるのではないだろうか。

ところでこうした母系制社会は、その存在自体が疑問視されるほど直接的な資料が乏しい。その根拠として河合（2000）は、「母娘結合の世界は文学以前の状態ということもできるので、あまり語られることもないと言っていいだろう」と記している。語られることがないのは、それが話題にすべき余地もないほどにあまりに当然で「自然」なことだからかも知れないし、それが言葉では捉え切れない「身体知」に属する事態であるからかも知れない。いずれにしても、母娘関係の継承は、まさにその破断をもって物語化する。以下にその歴史的変遷を概観してみたい。

1-2. デーメーテルとペルセポネ（コレー）の神話

1-2-1. Jung と Neumann の解釈

母娘関係を論じる際に、多くの研究者が参照してきたのはデーメーテル（さまざまな表記が

されるが、本論ではすべて基本的にデーメーテルと表記)とペルセポネ(これも様々に表記されるが、本論ではすべて基本的にペルセポネ、あるいはコレーと表記)の神話である。この神話は上述のように、「自然」に継承されてきた母系制(Bachofen や、その時代性を継承する Jung や Neumann など多くの研究者たちにとっては母権制であるが)に、父権的なものがくさびを打ち込む物語として理解され、とりわけ母娘関係を語ろうとする研究者は臨床心理学者であれフェミニズム運動の活動家であれ、無視できない(端的に言えば、その筋書きから逃れることのできない)物語となっているように思われる。そこでまず、その概要をいくつかの資料(高津;1960、Hall;1980、Grannt. et.al.;1973 など)に基づいて概観してみたい。

デーメーテルは母レアと父クロノスの間に生まれた(デーメーテルのきょうだいたちには、ヘスチア、ヘーラー、ハーデス、ゼウス、ポセイドンがいたが、ゼウスを除いて他の息子娘たちは、子に打倒されるという予言を恐れたクロノスにすべて呑み込まれた。ゼウスだけがレアの母ガイアに託され、やがて長じてクロノスを倒し、きょうだいたちを助けて神々と人間を支配する主となる;Campbell;1964)。やがてデーメーテルは兄ゼウスの4番目の后となり、ペルセポネを産んだ。

ペルセポネがまだ幼かったとき、父ゼウスはデーメーテルには内緒で、ペルセポネを花嫁にしたいという、きょうだいのハーデスの求めに応じることを約束する。そうしてシシリア島の森で、土地の少女たちと共に花を摘んでいた時に、ゼウスは木陰の小さな谷間に一本の美しい水仙を咲かせた。ペルセポネがその花を摘もうと仲間たちから離れた時に、大地が割れて戦車に乗ったハーデスが現れ、地下の彼の国に彼女

を連れ去った。ペルセポネは泣き叫んだが、結局ハーデスの妻にされてしまった。

デーメーテルは娘がいなくなったことを知り、またゼウスがこの計画に加担していることを知って、一滴の水もパンも口にせずに娘を捜し歩いた²⁾。

そうこうするうち、エレウシスにたどり着いたデーメーテルはかの地の王ケレオスと妻メタネイラに親切にされ、その恩に報いるべく彼らの子デーモポーンの乳母となった。デーモポーンは急速に成長したが、それはデーメーテルが彼を不死にすべく、昼間は神々の食物で香油としても用いられたアムプロシアをデーモポーンに塗り、また夜には死すべき部分を焼き消すために火中に入れていたからである。ところが事情を知らないメタネイラにその場面を目撃され、邪魔が入ったことに逆上したデーメーテルは怒って子どもを床に投げ捨てた。そうして女神の正体を顕わし、自らの寺院を建てるよう命じた(ここで行われたのが「エレウシスの密儀」で、紀元前14世紀ごろから紀元後400年近くになるまで公の制度として存続したという。なお、その内容については後述する)。

穀物の女神でもあるデーメーテルが神々との交わりを避けて天に帰らないので、大地は実らず不毛となった。ゼウスはオリンボスの集いに参加するようデーメーテルを説得するが、ペルセポネが帰らぬうちは大地の実りはないと宣告したため、ついにゼウスは折れてハーデスにペルセポネを返すように命じた。その際、冥界で何も食べていないことが条件とされたが、ハーデスはザクロの実を数粒(4粒、とも6粒ともいわれている)ペルセポネに食べさせたために、完全に母の元に戻るができなくなり、結局ペルセポネは一年の一時期(4粒の場合は2/3、6粒の場合は半年)をデーメーテルと過ごし、残りの時期をハーデスと共に冥界で過ごすこと

になった。かくしてペルセポネが母のもとにいる間は大地に実りがもたらされ、残りの時期は大地も枯れ果てるようになった、という。

なお、後にペルセポネは冥界の女王になるが、オデュッセウスやプシュケー、ヘラクレスなどのギリシア神話の登場人物が冥界に来た時には、彼らの案内役を務めたとされている。

Jung (1951/1983) は「母娘元型—デーメテル=コレー神話」という論文で、母娘関係の原初的あり方を取り上げて臨床的な夢との関連を議論しているが、その末尾で「デーメテル=コレーは男にはわからない、男を除いた母と娘だけの体験領域を表している。デーメテル祭儀の心理は、実際、母権的な社会秩序のあらゆる特徴をおびており、その中にあっては男はなるほど不可欠の存在ではあるが、その他の点では邪魔な存在なのである」と、述べ、事例に見るアニマ像との関連でコレーの役割を語ることとはあっても、ここでは母娘関係そのものに踏み込もうとはしていない。

しかしながら母の元型を扱った「心理学から見た母の元型」(Jung; 1938/1981) においては積極的に母娘関係を議論しており、その中で彼は娘の母親コンプレックスの在り方として以下の 4 種類のタイプを見出している。

a) 母性的なものの肥大：母親と同様、子を産み子どもを育てることが唯一の存在理由であるような娘。夫は生殖のための道具であり、母という役割に全人格が埋没するほど無意識的な権力志向は強まり、さらにその娘の固有の人格を破壊するほどになる。

b) 過度のエロス：母性本能の代わりに、エロスの側面が前面に出て、父親への近親相姦の願望を持ち、男性へのエロスの関係を追求する娘。それは妻帯者への誘惑のかたちをとったりするが、目的を達成すると関心は別の男に移る。

時に男性からは、アニマの投影を受ける。

c) 母との同一視：自らは空虚なまま、超人的な人格を持つ母に忠誠と献身を示し母と同一化するが、次第に母親に対して無意識的な暴君になっていく娘。全く無力な娘の装いは支えたい男を呼び集めるが、母の庇護のもとにいる娘は略奪されるしかない (Jung は、ここでペルセポネを挙げると同時に、ハーデスの略奪と妥協に娘の意図をほのめかしている³⁾)。

d) 母に対する防衛：母の圧倒的な力に対する防衛を特徴とし、「母には似たくない!」という強い動機を持っている娘。翻って自らの欲求については無知で、人生の選択は漠然としている。母に対する防衛 (抵抗) ゆえに、家族や慣習に抗い、月経困難や不妊など身体面での抵抗も現れる。時に母の無知や無教養を論うために知性化し、男性的特徴を持つようになる。

娘の在り方に関する Jung のこうした指摘は、決して女性の発達論を含むものではなく、典型的な母娘関係のありかた、とりわけ娘の様態を類型化したものであるが、これに対し、Jung 派の高弟 Neumann (1953/1980) は、男性の意識の発達を説いた『意識の起源史』に対応する形で女性の意識の発達を詳述した『女性の深層』において、この神話を「自己保存の段階」と「父権的ウロボロスの侵入の段階」に位置づけて論じている。

Neumann は「女性の自我が、母性的な無意識や母性的な自己といまだ結ばれたままにいる自己保存の段階は、デーメテルとコレーの象徴的關係がよく表している」と始めている (以下、Neumann の記述に関して、コレーはペルセポネと同一である)。「自己保存の段階にきまってみられるのは、女性が心理的また社会的に女性グループ—母系集団—のなかに留まり、上にたいしては母親集団の、下にたいしては娘集団への関係を、終始維持し続けるということ

である。」つまりこの段階では、デーメーテル（母）とコレー（娘）は一体化しており、場合によっては混同されることすらある、という⁴⁾。

さらに続けて「自我女性における自然な同一視の関係は、妊娠による血の結びつき、つまり、母親との本源的関係から派生しており、この本源的関係そのものがまた本来母親に由来している。それゆえ一体関係を求める憧憬は、女性に生涯ついてまわり、類似の状況をくりかえし作り出そうとする傾向となって表れる」と述べている。ここで取り上げられているのは、母系制の自然な継承の傾向である。

重要なことは、「この“段階”は、たんなる歴史上の過去の抽象的な図式ではなく、昔も今も機能していて人格の発達に不可欠な無意識の布置を示す」という点である。具体的には、「見かけは父権的な家族の中で、妻の母が、ときに妻とその家族全員にたいする本来の支配者である」といったような場合が生じたり、あるいは男性への敵視や冷淡さ、その結果としての結婚生活の障害も起こりうる、とされている。さらに女性の関心が子どもだけに限られ、子ども一途の状況から子どもの側に神経症的疾患が生じる場合もある、とされている。あるいはまた、男性に対する関心が性的なものだけに限定されて、関係抜きの快楽におぼれたり、ただ子どもを産むためだけに男性を利用する、といった事態が生じることもある、と Neumann は述べている。いわば、母娘関係の継承が何にもまして重要であり、ここでの男性の存在は付加的なものに過ぎない段階であると言えよう。

次の「父権的ウロボロスの侵入」の段階は、「いまだ母権段階にあって個人としての男性とは結びつくことのない“処女”が神と関係を持つ話として表現されている。この神は、雲、風、雨、稲妻、黄金、月、太陽、その他のものとなって女性を征服したり、あるいはまた、動物の姿を

した聖なる男根として、蛇や鳥、雄牛、雄山羊、馬、その他のものとなって女性の中に侵入する」とされ、デーメーテルとペルセポネ/コレーの神話においては、冥界の王ハーデスと、彼によって誘拐されるコレーにその表現が見られる。この段階では「女性的なものは、男性的なものに捉えられ全身全霊で感動を体験するなかで、自己保存の状態を脱し、自己放棄という新しい経験段階に達する」とされているが、「男性的なもの」や「女性的なもの」は必ずしも具体的な存在である必要はなく、例として Neumann は音楽などの精神的興奮でオルガズムに達したり、物事を全身で理解する、といった事態を挙げている (Qualls - Corbett, 1988 の『聖娼』は、この過程を詳細に描き出している)。

ところが「男性的なもの」がこの段階では神的で圧倒的なものであるために、この段階に留め置かれると、「女性的なものは“処女”として精神的な父と結合した状態を続ける」ことになる。「こういう場合、女性は、生涯ひとりの男性の“アニマ”として、その男性の“灵感の源”として生きることになり、彼女個人の人生を生きる機会を失って、ありうべき世間的な生活や母親となることなど放棄することになりかねない」と Neumann は記している。また「予言者や修道女、“守護霊”や“天使”といった女性は、この元型段階への固着の表現であることが多い」としている。いわゆる「永遠なる父の娘」である。

ここでさらに別の困難さも加わる。「母親と結びついた自己保存の段階から父権的ウロボロスにたいする自己放棄にいたる必然的な発達過程は、母親とのある種の敵対関係を免れがたくする」というのである。つまり「父権的ウロボロス段階への移行にあたっては、母親が恐ろしい姿で立ち現れて威力をふるい足枷となる。」これは童話の中では、魔女（グレートマザー）

が娘に魔法をかけたり幽閉したりする形で表現されるが、デーメーテルとコレーの神話においては、(必ずしも Neumann は明記していないが) エレウシスにおける乳母としてデーモポーンを養育するデーメーテルの一連の儀式の形で表現されているように思われる。上述のように、1500 年以上続いた「エレウシスの密儀」につながるこの部分は、母娘関係を考察する上で重要な内容を含んでいると思われるので、以下に少し詳細に検討してみたい。

Hall (1928/1980) は、守秘の誓いに守られたこの儀式の詳細を報告しているが、それによると儀式は毎年春に行われる「小密儀」と五年毎に行われる「大密儀」に分けられるという。前者の主演はペルセポネ＝プシュケー(魂)であり、デーメーテルとペルセポネの神話に則って、冥界に連れ去られ、そこで留め置かれる苦しみが表示される。エレウシスの教義においては、現世も冥界も本質的に差異はなく、物質世界に誕生することこそが(ペルセポネ/プシュケー/魂にとって)死であり、「唯一の真の誕生とは人間の霊的魂が自分の肉体という子宮から外に出ることによって行われる誕生であったという。」小密儀は真夜中に行われ、志願者は入り組んだ地下室で、さまざまな試練と危険が待ち受けている拷問のような通路を通り抜ける。これは身体を伴って物質世界で魂が生きることを表しており、この試練を通過したものだけが「ミュステス(曇ったヴィジョンを得たもの)」という称号を与えられ、「大密儀」への参加を許される。

「大密儀」の主演はケレス＝デーメーテルであり、デーメーテルとペルセポネ/コレーの神話の後半部分を表現している。デーメーテルは直感と理性を象徴する二つの松明を掲げて、娘(魂)を探す。そうしてエレウシスで娘を見つけ、

その感謝のゆえに人々に穀物栽培を教えるのだが、儀式では、志願者は真っ暗な部屋から次第に明るい部屋へと移っていき、この遍歴のクライマックスにおいて、大きな丸天井の明るい部屋で輝かしい光明に満ちた女神ケレス(デーメーテル)の像に出会う。そこで「エレウシスの密儀」⁵⁾の最高の秘密を伝授されるという。

ここでデーメーテルとペルセポネ/コレーの神話においては、デーメーテルは常に子(ペルセポネ、デーモポーンも)を自らのもとに留め置こうとする母であり、また部分的にしかそれを果たせなかった(ペルセポネは半年しか手元に置けず、デーモポーンも不死(=神化)の途中で妨げられる)神である点は注目しておきたい。Neumann の「自己保存の段階」はこの神話において破られることを前提とした段階であるとともに、新たな均衡(数か月ずつペルセポネ/魂がデーメーテルとハーデスのもとを行き来する)へと至ることが、示唆されていると考えられるからである。

このように、明確に死と再生のプロセスを含み、またそれでもなお完全な自立を許さない「エレウシスの密儀」によって、あるいはそれにもかかわらず、もたらされる「父権的ウロボロスの侵入の段階」において、女性は「精神」あるいは「意識」という男性的なものをいったん外側に体験する。Neumann は「女性は、われわれの文化の父権の様式に従うことによって、本源的関係の中での自然状態から解き放されて、男性的なものを具体的な父として夫として、またアニムス⁶⁾として指導者として体験する」としている。ただし、ここで精神的・男性的なものと一体関係を求めるあまり「アニムス憑依」という状態に陥ると、自身の大地的本性を放棄して、神経症や精神病にいたる危険すらあるという。

「そのとき母性との根源的關係は、父権的ウロポロスによってそこから解放されるため、犠牲にせざるをえない」のだが、それを完全に切り離すのか、デーメーテルとペルセポネ/コレーの神話で示唆されているように、ある種の均衡状態を是とするかについて、Neumann の記述は微妙である。すなわち「女性においては普通、全体性との関わりは意識とかかわることによって完全に解消されるわけでは決していない。自我を意識の中心と同一視しながらも、全体性の様相は女性的な自己の形で依然として生きており全体感は失われない」と述べているからで、いわば（全体性の象徴である）母娘関係は無意識的な形で維持されることを示唆しているからである。

いずれにせよ、父権的ウロポロスの段階においては、「男性的なものは圧倒する他者として体験され、女性的なものはみずから超個人的な男性的なものにおいて失い、自分を断念することによって、自らを新たな段階における女性的なものとして体験する」ことになる。

Neumann はこの後に、デーメーテルとペルセポネ/コレーの神話の枠を超えて、女性の精神的性格が開花する「ソフィアの段階」、さらには父権段階と父権の意識を克服し、グレートマザーとの根源的關係が新た新しい次元で再現される「個性化過程の最終相」を想定している。これらについては女性の個性化やアイデンティティをめぐる議論の中でも（必ずしも明示的な形ではないが）取り上げられていると思われるので、後に改めて論じることにした。

このように見てくると、Neumann の述べる女性の発達段階は決して直線的なものではなく、各段階で枝分かれして類型化するような形で描かれているようにも思われる。そうした多様な在りかたをそのものとして受け入れること、（父権的な形で）制度や垂直型のシステム

として構造化するのではなく、（古代ギリシアの都市国家のように）多様性の共存という反構造化、非構造化を一つのイデオロギーとして積極的に認めていくことこそ、女性（性）の発達の真髄であるとも言えるのかも知れない。

さてここまでは、もっぱら Neumann の発達段階論（一応、仮に序列化したそれ）に基づいて、デーメーテルとペルセポネ/コレーの神話を読み解いてきたが、次に筆者の見解とその後の発展について述べてみたい。

1-2-2. デーメーテルとペルセポネ/コレーの神話解釈の展開

筆者は以前、女子大学生によって語られる臨床事例をもとにこの神話について「父なるもの（ハーデス）が、母娘（デーメーテルとペルセポネ）の結託を強化する積極的な役割を担っている場合が多い」と見なし得ることを示唆したことがある（高石；1997）。以下にその概要を述べる。

まず、娘である彼女らが語るのは多く母の愚痴であり、それは父親の行状や性格、経済的困窮、自らや近親者の病気や介護、家族親族間の文化的差異による人間関係のトラブルなど多岐にわたるが、それらを通して最終的に娘たちに伝えられるのは「困難な事態に対する努力を認め、感謝してくれない配偶者」である父への恨みであり、さらに言えば「あなたは私に感謝し、支えてくれるわよね」という母からの確認であり、「私を支えてくれなければあなたを愛さないわよ」という暗々裏の脅迫ともいえるメッセージである場合が少なくない。というのも、娘たちはこうした母の愚痴の聞き役をいかにも重く、自らに課せられた義務のように語るからである。

しかしながらそれは同時に、母の愛の保証でもある。傷つきやすい母を支えている限り、娘

は「母を支える娘」として愛され、求められ、自らの居場所を確保することができる。こうして母と娘は父を挟んで同盟関係を結ぶが、ここでの同盟は基本的に対等とは言えない。同盟関係が結ばれる前段階で、長きにわたる母娘結合、Neumann が本源的关系と呼ぶ母娘関係があるからで、母と娘が取り結ぶこうした同盟関係の母胎は、グレートマザーとして圧倒的な力を持つ母（デーメテル）と、それに呑み込まれつつ安住する無力で無垢な“乙女”（コレー＝ベルセポネ）の関係である。この本源的关系からの逃れ難さは、心理学のみならず文学、芸術など広範な領域においても繰り返し取りざたされ、勇気をもって語られたり、また「言わずもがな」の事態として語られずにもいる。橋本（2000）はこの点について、「娘は、母と同一視すれば自分を失い、母から離れようとすれば母からの圧力を受け苦しむというジレンマを抱えている。母娘関係は、このように、意識に上らない、動物的なレベルで動いており、本来、意識化や言語文化になじみにくい世界である」と述べている。

それでも娘たちはこうした葛藤を口に出して語る。「あの人のようにはなりたくないけれど、突き放すと何て冷たい人間なんだと自分のことを責めてしまう」、「自分のようになるな、とお母さんは言うけれど、そのくせ気に入らない格好をすると全力で貶しにかかる」、「あなたはあなたの好きなようにしなさいと言いながら、一人で祖母の介護をしなければならぬ愚痴をさんざん聞かされる…まるで私を見捨てるの？と言われているみたいに…」それは成熟に伴う母娘間の葛藤を経て、ある程度の母娘間の距離を確立し、自立性を持った青年期の娘たちだからこそ可能になる述懐かも知れないし、より積極的に母娘関係の間に楔を打ち込むハーデスの役割を娘たちが治療者に期待するからかも知れ

ない。

ここでデーメテル・ベルセポネ/コレー神話におけるハーデスの略奪、凌辱を字義通りの意味で解釈することは、少なくとも心理学的な観点からすると短絡的で一面的であるように思われる。Freud がエディプス神話における母との婚姻を「リビドー」と置き換えたように、あるいは Jung や Neumann が先述のようにハーデスの行為を「父権的意識の侵入」と置き換えたように、それらは象徴的多義的に解釈されるべきであって、またそうするからこそ多様で深遠な意味を持つようになるからである。そうした観点から改めてハーデスの行いを見直す時、これは「男性による性的虐待」のみならず、「意識の介入」、「エロスに対するロゴスの優越」、「言語化による楔（くさび）」、あるいはまた「準備された分断」、「巧みな受動的方略」、「再結託のための共通の敵」などの解釈を許す事態といえるのではないだろうか。

例えば現実には起こっている事態として、確かにハーデスのような男性は実在する。その所業は女性に拭い去れないトラウマを刻印づけ、その後の人間関係に甚大な影響を及ぼすことも臨床現場では繰り返し耳にする。例えば、必ずしも直接的な性的被害体験を持たずとも、母との性交場面を目撃することで父を性的存在と見なした娘が、その後に身体に触れられたことがトラウマとなり、大人になって関係障害に陥る事例もある。これは字義通り、母娘の間に打ち込まれた楔であり、母娘関係を引き裂くと同時に、父も母も、さらには娘である自分自身まで含めて、性的存在であるという事実を突きつける事態でもある。

母娘が一体化するあまり、母の気持ちを自らの気持ちと区別できず、治療者に語るうちに（これを「言語化による楔」とも言えよう）自分が本当に望んでいることが何かを次第に感得して

いく娘の述懐は臨床現場では枚挙にいとまがない。

さらにどこか操作的な「言われ感」や「やらされ感」を治療側に引き起こす、娘の受動的な方略は、むしろ無力感を誇示し、日常的な生活の中で相手（多くの場合、最初は母親だが、やがてパートナーへと敷衍されていく）の援助を引き出す能力にその範を見るようにも思う。その意味で、デーメーテルとペルセポネ/コレーの神話は、Neumann の言うように女性の意識の発達における一段階を表現しているばかりではなく、繰り返し演じられながら、その都度洗練されていく母娘関係の脚本であり、常に母娘関係がそこに立ち戻る物語ではないかとさえ思われるのである。

この点について國吉（2015）は、コレー（ペルセポネ）の視点からこの神話を解釈し、以下のような興味深い読み直しを提言している。すなわち「母と結びつきの強い娘コレーに注目すると、一見コレー自身の考えは明確に描かれておらず、受身で明確な意図を持たないように見える。だが、最終的に娘コレーは何を得たのだろうかという視点で再度この神話を見直した場合、実はコレーは母親も配偶者（ハーデス）も、都合よく両方手に入れていることに気づく。」というのも「母親のもとを行き来し『娘』を満喫しつつも、配偶者ハーデスの横で黄泉の女王として君臨したのはコレー自身である」からで、「デーメーテルとコレーの神話からは、このように、結婚してもなお合法的に母親に依存し続ける、娘の側の母親への“巧妙な”依存性も読み取ることができる」としている⁷⁾。高石(2019)でみたように、結婚後も母娘関係は質的变化を遂げつつも維持されることを併せ考えると、こうした指摘は「父なるもの（ハーデス）が、母娘（デーメーテルとペルセポネ）の結託を強化する積極的な役割を担っている場合が多い」と

いう上述の筆者の視点とも共通する貴重な示唆を含んでいると言えよう。

廣澤（2003）もまた、この神話のモチーフを援用して、Anorexia nervosa（神経性食欲不振症）の心理臨床に関する試論を展開している。廣澤はデーメーテルに象徴される「身体に根付く女性性」とペルセポネに象徴される「靈魂（スピリッツ）に根付く女性性」が本来源を一にしておき、この神話はこうした女性性の二側面が引き離され、再び結びつくさまを描いており、「本来源を一にしていた女性性の二側面は、一旦切り離されることによって、より流動的な関係性を築くようになったと言え、混沌とした一から二という分化が生じ、しかもその二側面は結合と分離を延々と繰り返していくと考えられる」としている。そうしてこの両方を流動的に生きるというあり方が、「Anorexia nervosa（神経性食欲不振症）の女性及び『父の娘』と呼ばれる現代女性に対して、選択しうる一つの道をイメージとして提示してくれているのではないか」としている。さらにそのためには、「靈魂（スピリット）に根付く女性性」は身体を通してこそ具現化され、「自然のリズムにのっとり、命の永劫性を担いつつ、個としての尊い生を主体的に生きていくという、いわば『主体的受容性』を引き受けて行くことが必要不可欠である」としている。

興味深いことにWalker, B.G. (1983/1988) はペルセポネについて、その名が「破壊するもの」を意味し、もともと三相一体の女神デーメーテルは、老婆 Crone、処女 Kore、母親デーメーテルの三相の神々が、回る三角形の3つの頂点のように、周期的に互いの後を継いだ、としている。また、ペルセポネはエレウシスの密儀よりはるか以前から冥界の支配者であり、太古から「死の女神」であった、とも記している。こうした見解は、もともと一であった女性性が分

離結合を繰り返すという廣澤の見方や、神話が繰り返し演じられる脚本であるという筆者の見方と符合するばかりではなく、ペルセポネの「破壊する」属性と「靈魂（スピリット）に基づく女性性」、その病理的表現型としての *Anorexia nervosa* が持つ「厳しさや容赦のなさ」という属性が通底するように思われる。また、デーメーテルとペルセポネ/コレーの神話では欠落した「老婆 Crone」の相については、介護をめぐるきわめて現代的な課題として、全き女性性の回復という観点から改めて考察すべき内容であると思われる。

デーメーテルとペルセポネ/コレーの神話について議論するにあたって、最後に興味深い一書を挙げておきたい。Bolen (1984/1990) は『女はみんな女神』という画期的な著書の中で、「傷つきやすい女神」としてデーメーテル、ペルセポネ、ヘーラーを挙げ、デーメーテル元型、ペルセポネ元型などとして、それぞれが独自の発展を遂げる、としている。例えばデーメーテル型の女性についてはその属性として、「母親」「食物の提供者」「寛容な母親」「悲しむ母親―気分落ち込みやすさ」「破壊的な母親」などを持ち、その成育史や結婚、セックス、中年期、晩年のあり方を具体的に明らかにし、その成長の道まで提示している。ペルセポネ型の女性についても、その属性として「アニマ的女性」「子ども女」「冥界への案内人」「春の象徴」などを持ち、同様に成育史や晩年までのプロセスを詳述し、「宗教的なエクスタシー体験の能力を発見する」「霊媒もしくは超能力者としての素質を発展させる」など成長の道を提示している⁸⁾。

一見荒唐無稽とも見えるこの提言は、実は Jung 派として上述の Jung や Neumann の神話解釈や議論を忠実に踏まえた上で、さらにそれを Neumann のように女性性の発達という形で一元化することなく、多様なその存在そのま

まで成長発達する道筋を提示しているという意味では、多神論の心理学を唱える Hillman (1981/1991)、あるいは河合 (2000) の『紫マンドラ』にも通じる革新性を持っているように思われる。

デーメーテルとペルセポネ/コレーの神話はこれまで見てきたように、母娘関係のいわば母胎となるような神話であり、その後の展開は文化的背景が異なる場合、ある種の改編を余儀なくされることは十分想定される。とりわけ、「我が国は母権から父権、父系の制度へと変わってきながら、現代に至るまで母性心理を保持しているところに特徴を持っている」とする河合 (2000) の所論に従えば、女性性の発達のプロセスはおのずから我が国独自の色合いを帯びたものにもなろう。こうした点について、積極的に議論しているのは織田 (1993) や横山 (1995) であり、その他の多くの Jung 派の分析家たちである。そこで次に、そうした研究者たちの所論を概観していくことにしたい。

1-3. Neumann の女性の発達と織田の「鉢かづき」論の比較

織田 (1993) は西洋の昔話に比して我が国の民話や昔話には、「対決する女性」や「怒りの女性」が特徴的に見られる、として、独自の視点から女性の発達仮説を提唱している。織田は Neumann との比較の上でそれを掲げているので、それらを並列して比較してみたい (表 1 参照)。

表1 Neumann と織田による女性の意識の発達段階（比較）

Neumann による女性 の心の発達段階	両親や異性との関係（Neumann）	織田による女性 の心の発達段階	両親や異性との関係（織田）
① 母子の原初的関係の段階、またはウロボロスの段階	娘は両親あるいはそれに代わるものに、完全に依存している。娘の自我は可能性としてしか存在しない。	① 母子一体の関係の段階	Neumann における母子の原初的関係の段階に相当する。子どもの身体や母親が、子どもの自我を基礎づけている。
② 自己保存の段階（母権段階の前半）	ギリシア神話のデーメテルとコレーのように、母と娘は、相互にきわめて身近な関係にある、母性が支配権を握っており、娘が一人の女性として男性に出会うことを妨害する。	② 母娘の姉妹的関係の段階	Neumann の自己保存の段階に相当する。意識の世界では母と娘がお互いに別の人間であることがわかっているが、二人が無意識的には、姉妹のような同質の関係にある。家族の中で、父親の存在感は乏しい。夫や子どもがあっても、心理的にはこの段階を生きる女性が少なくない。
③ 父権的ウロボロスの侵入の段階、または自己放棄の段階（母権段階の後半）	娘は依然として母親に依存的であるが、異性的なものと初めて出会う。異性は個人としての男性ではなく、娘は圧倒され、怪物としての異性のしもべとなる。神話では、死の結婚として語られる。	③ 母親の死による母娘分離の段階	個人としての母親は死ぬが、限界としての母はなお影響力を保っている。これによって娘が母親を超える作業が開始される。父親は依然として無力な存在である。母の死には、しばしば悲しみを伴う。
④ 男性英雄による父権的ウロボロスからの解放の段階（父権段階の前半）	白馬にまたがった王子さまが現れて、とらわれていた娘を怪物から解放する。女性はウロボロスの親から解放され、男性英雄の意識を自分の意識としてそれを高めるが、英雄に依拠している。	④ 娘自身によるウロボロスとの対決の段階	娘は母親的、父親的そして異性的で非個人的なウロボロスと対決する。娘がウロボロスを殺害することによって、娘の自我も内なる異性も、個人としての人間化の過程を歩む。沼の主と対決する蛇婿入り水乞型の末娘に、この段階の女性を見ることができる。
⑤ 父権的結婚の段階（父権段階の後半）	個人としての女性が個人としての男性と結合することによって、女性は個性を発達させ、日常の現実の中である程度の創造性を発揮することができる。しかし女性における心の中の異性はもっぱら夫に投影され、夫との間に対等な関係は成立せず、彼が心理的に優位な地位を占める。	⑤ 仮面によって守られた変容の器の段階	仮面に守られて、なお未成熟な女性が、成熟分化の過程を歩む。この過程において、ウロボロスの父や母や異性との対決は、娘自身によってすでになされている。娘は仮面の中で、悲しみや淋しさなど困難でマイナスな側面を生きさせられる。
⑥ 高次の両性具有の実現の段階、または自己実現の段階	女性が内なる男性を夫や息子に投影し、彼らの成功をもって自らの自己実現というするという生き方をやめる。女性は、内なる女性と男性とが統合されたものとしての心の全体性、つまりセルフを生きられるようになる。プシケーとエロースの神話における、プシケの心の成長とエロースとの結婚の成就に、この段階になる女性を見ることができる。	⑥ 異性との対等な結婚の段階	投影対象としての異性の成熟と、内なる異性の成熟が併行して進み、自我はその両者とのかわりを深める。しかしウロボロスの侵入を許さない点と、女性自身がウロボロスとの対決を経験している点で、Neumann の発達仮説によって成長した女性像とは異なる。

ここで実際に明らかな類似性が見られるのは、原初的な母娘関係を仮定する①だけであって、②以降の両者の所論は相当異なっていると言わざるを得ない。この点について織田は、「文化差に由来する心性の相違は想定される」としながら、同時に「受身的女性と、怒りの女性あるいは対決する女性とは、両者ともに同時に私たちの心に内在する普遍的な心理である」として、(意識化や攻撃性といった)「女性の心理を男性の借りものであるとする視点は変更を迫られている」と、時代的な変化も視野に入れている。織田のこうした主張は自身の体験した臨床事例と、我が国の昔話、とりわけ「鉢かづき」をめぐる考察によるところが大きい。そこで以下に、織田が依拠した「鉢かづき」に見られる女性の発達プロセスについて概観する。

《鉢かづきの説話のプロット》

- ・河内の国の長者夫婦が、子ども欲しさに長谷の観音に参ったところ、姫君が生まれる。
- ・娘が 13 歳になったとき、母親が病気になる。世を去った。
- ・臨終の枕元で母は、娘の行く末が守られるよう、長谷の観音から賜った箱を姫の頭に被せ、さらにその上に鉢をのせた。その鉢は母の葬儀後も取れなかった。
- ・父は再婚し、「鉢かづき」は両親に疎まれた。やがて一人母を恋慕う彼女は、生家を追われた。
- ・悲しみのあまり、母のいる死の国へ行こうと川に飛び込むが、鉢のために沈むことができず、漁師に助け出される。
- ・放浪する鉢かづきは、山陰の国司に拾われて下女として働くことになる。
- ・湯殿で背中を流したことがきっかけで、国司の四人の息子たちのうち、顔かたちの美しい末息子「宰相の君」に見染められる。

- ・人目はばかりず鉢かづきの所に通い詰める宰相の君との仲は、やがて周知のこととなり、宰相の君の母は鉢かづきを追い出そうとする。
- ・命を懸けて鉢かづきを守ろうとする宰相の君は、嫁比べをするという母の奸計に抗しきれなくなって、二人で駆け落ちしようとしたところ、鉢が落ち、中から金銀財宝と美しい小袖、そして見目麗しい鉢かづきの顔が現れる。
- ・結局、嫁比べでその才能を如才なく発揮した姫君は妻となり、宰相の君は総領となる。
- ・長谷の観音で父親と再会し、皆で幸せに暮らす。

ここでまず織田(1993)が取り上げるのは、娘が 13 歳になったときの母の死による母子分離である。「鉢かづきによる母親の死は、Neumann のいう父権的ウロボロスの侵入による母と娘の分離ではなく、むしろ自然な母娘関係の発達によって、＜母娘の姉妹的關係＞を克服することの始まりである」と述べている。

つまり織田によれば、「母娘の姉妹的關係」、すなわち「意識の世界では母と娘が互いに別の人間であることがわかっているが、二人が無意識的には、姉妹のような同質的關係」が、自然な母娘関係の発達によって「克服」されることになる。しかし病による死別は、決して主体的能動的な「克服」ではなく、運命の定めによりいつの日か「もたらされるもの」と考えるべきであろう。その意味では、これをア・プリオリな「段階」としてまず仮定することには、いささか無理があるように思われる。むしろここで母を、「死すべき運命にあるもの」として考えるなら、象徴的な次元で、横山(1995)のいう「イザナミの死」、すなわち「新しく、より意識的となった＜自我＞を生み出すため」に「死すべき運命にあった」女神に相応する存在と見なす方がよりふさわしいのではないだろうか。

思春期以降に、ある種の子どもたちは内省的な自己意識を持つようになり、それまで母子関係を通して当たり前のように与えられていた安心感や存在意義を自らに問うようになる。中には、その問いかけの中で不登校や摂食障害といった症状を呈する子どもたちもいる。思春期において子どもたち（鉢かづきにおいては娘）は、「原初の混沌でポジティブもネガティブも分化することなく体現していたイザナミ」（横山；1995）から「女性性・母性の肯定的な側面」と「否定的な側面」が自ずから分化する、あるいはより母（女神）の側の無意識的な意図（あるいは日本文化に内在されている母性の強さと賢明さを強調するなら、むしろあからさまな意図）によって、自らの消失や死をもって「女性性・母性の肯定的な側面」を封じ、それゆえに永遠性（あるいは反駁・離脱不能性）を獲得するのではないか、とも考えられるのである（例えば「鶴女房」における「見るなの禁」は、こうした方略の典型例である）。

さて、このような母が、自らの身代わりとして残した鉢は、織田によれば非常に多義的である。第一にそれは「死を目前にした母親が、自分の死後娘である鉢かづきの行く末が守られるように、長谷の観音に祈願して頭に被せた鉢」であり、したがってそれは「仮面としての一般的特性のほか、元型としての母という意義を持つ」。ここから、「鉢を元型としての母、母の元型的身代わりと仮定すれば、個人としての母の死にのみによっては不徹底であった母娘結合の解消が、元型としての普遍的な母に娘である鉢かづきがいかに関わるかということによって左右される」、つまり「元型的な強制力」を持ち、「内界および外界と、仮面を身につける人間とを遮断」する機能を持ち、さらに「頭に鉢をかぶっているために河の水に浮かんだままで沈まず、死ぬことができない」という、守る機能を

併せ持つ鉢と共に生きたからこそ、それは「変容の器」として機能した、と織田は主張する。さらに、長者の姫として育てられた娘を下女として働かせたのもこの鉢であり、その意味でこの鉢は、「全体性を達成させる」機能、さらには「隠れる場所を提供する」機能、「仮面が表しているものへの同一化」＝「容器としての女性」を強制する機能をも併せ持っている、という。

千野（2016）も同様に「鉢かづき」を心理学的に取り上げる中で、13歳という娘の年齢について、「この年齢は思春期の始まりに当たる。思春期とは、子どもの身体から大人の身体へと変化する時期である。蝶であれば、幼虫から成虫へと変化する間のさなぎの時期である」として、この年代の娘を残して死なねばならない母が残した「この鉢は守りと同時に母が与えた枷でもある」し、あるいはまた「個人を超えた母なる自然の守りといえるかもしれない」としている。こうした見方は、改めて我が国における母娘関係の結びつきの強さを示すと同時に、そこにおける（必ずしも男性性の介入によらない）変容可能性をも示唆しているように思われる。

もっとも入水まで試みた鉢かづきを救うのは漁師であり、山陰の国司という男性である。彼らは鉢かづきとして生きることを強要する、あるいは下女として使えることを強いる、という意味では厳しい男性性を表現しているとも言えるが、彼女を救うという意味ではむしろ母性的な役割を果たしている、といえなくもない。ここでもまた、横山（1995）の「日本神話における父親とは、言葉の真の意味での『父権的な父親』ではなく、本来は母性に属する自然と密接に結びついており、それゆえに、これらの（古事記における）父親像は、母として機能し得る」という指摘が思い浮かぶ。河合（1982）もまた「母親の否定的な面が強すぎるとき、父親はむ

しろそれを補償する母性的な愛によって、娘の幸福を願っているように思われる。従って、ここには母娘結合に似た心性がはたらき、結婚は生じない…（中略）…父＝娘コンステレーションは、母＝娘のそれを補償する意味において、アジアの物語にはよく生じると推察される」としている。その意味では、我が国の物語では母娘関係を打ち破るハーデスのような強い男性性は、必ずしも必要とされていないのかも知れない。

下女として働くうちに、鉢かづきは「宰相の君」に見染められ、二人は愛し合うようになる。ここで現れる男性（宰相の君）は、織田によれば「ウロボロスの親（呑み込もうとする母親）と対決することによって」（実際は駆け落ちして逃げ出そうとすることによって）、親からの自立を達成しつつある存在である。と同時に、鉢かづきの女性性の発達の観点からみた時、湯殿で見染められて契りを交わす行為は「生のコンユクチオ」の体験であり、錬金術的な変容を示唆している、と織田はいう。そうして二人が出奔しようとしたとき、親を捨て、共に生きようと決意したときに、亡き母の「守りでもあり枷でもある」鉢は自然に落ちる。この点について織田は、「鉢かづきを母元型の強制力から解放するものは、Neumann の考えるような異性としての宰相の君の侵入ではなく、彼との対等な男女関係の成立と、両者の協力のもとでのウロボロスの両親とのある種の対決である」と結論付ける。ここでもまた、原初的な母親元型は打ち破られるのではなく、自ら割れてその役割を終える。また、これまでの鉢かづきの苦勞が、実は豊饒さを、女性としての美しさや才能をもたらしものであることを証明するかのようになり、「金銀財宝と美しい小袖、そして見目麗しい鉢かづきの顔」が鉢の下から現れる。これは亡き母から与えられたものであると同時に、彼

女自身がその守りのもとで育んだものでもある、という意味で鉢の「変容の器」としての機能、「全体性を達成させる」機能を示唆するものでもある。かくして鉢かづきは、嫁比べにおいて、かつて育んだ才能、新たに獲得した才能を如才なく発揮して妻として認められる。こうした結果から振り返って考えれば、鉢の形状を含めて、ここで表現されているのは鉢＝「容器としての女性」の持つ豊饒さ、多産性の象徴的表現であろう。ここにおいて、鉢かづき（娘）が母となることで、ひとつ次元の異なる母娘の再結合が達成されたとも言えそうである。

以上、もっぱら織田の主張する「新しい視点による女性の発達仮説」を「鉢かづき」を通してみてきたが、先述のようにこれはデーメテルとペルセポネ/コレーの神話をベースにした Neumann の女性の発達プロセスとは相当異なっていることは明らかであろう。この違いについて、ギリシア神話と日本昔話という素材の違いを超えて、文化的な背景の違いを想定せざるを得ないように思われる。横山（1995）もまた、「古事記を読んでいくと、Jung がみごとな解釈を与えている「デーメテルとコレー」のような「母－娘」関係の記述が全くないことには、誰しも気づくであろう」と述べているように、直接的に比較可能な素材は乏しい⁹⁾からである。

織田や千野、その他多くの Jung 派の分析家たちが、この「鉢かづき」のような説話に我が国の女性の発達のプロトタイプを見るのは、こうした分かり易い形で娘が結婚から母へと至るプロセスが描かれているからではあるが、Neumann と織田で大きく異なるのは母の不在であり、男の果たす役割である。他方、両者に共通するのは女性の発達が「結婚」に向けて展開するという点、その過程で母は常に豊穡

をもたらすものとして神格化されているということであろう。とりわけ母の神格化については、別論で取り上げるフェミニズムの観点から見た母娘物語にも出現する観点であり、そこで再度議論したい。

ところで発達段階という見方をとるとき、未熟から成熟、未分化から分化、劣ったものから優れたもの、といった価値判断がどうしても入ってきてしまう。もっとも織田は「ここにおける発達段階仮説は、各段階の順序に関して、必ずしも固定的なものではない」としているが、これを認めてしまうと今度は物語の展開が意味をなさなくなってしまう。この点について大森(2002)は、Neumann、織田、および筆者(1997)の女性の発達段階仮説を比較して論じ、その中で発達段階という考え方とは異なる、やまだ(1988)の「母子関係の綱目(ネットワーク)」モデルを紹介している。そうして、「臨床上是、発達段階という考え方も、ネットワークモデルといったような並列的な考え方も、両方共に念頭に置きながら生起してくるものごとを見ていくことが必要であるのだろう」と極めて現実的な方向性を提唱している。女性の発達という観点から母娘関係を見ていくとき、このように両者が不可分一体の様相を呈してしまうのみならず、複数の考え方が並行して存在するという事態を認めざるを得ないといったことが起こってくるように思われる。ここに母娘関係の重層性が表現されていると言えるのかもしれない。

なお、自説の展開については、別論文にて詳述してみたい。

注

- 1) Westermarck (1891/1933)、シュミット『人類発展史』(1910)などにより、家父長的な一夫一婦制と母系父系の双系制は原始社会から存在するだけではなく、狩猟・牧畜社会は家父長的であり、母権制の経済的基盤が農耕にあることを

主張し、Bachofen の原始乱婚制や母権制先行説は疑問視されている。もっとも Jung 派の Neumann は、Bachofen を支持して原始一夫一婦制を否定して原始集団婚説を復活させたプリフォートの『母性論』(1927)に依拠している。ただし、「父権的」「母権的」という言葉は心理学的な表現であり、政治状況や力の領域への適用は二次的にすぎない」(Neumann; 1953)として、あくまで心理学的な表現であることを強調している。

- 2) この間に諸国を渡り歩く過程で、豊饒の神である彼女に関する幾多の伝承が残された。それは水車を発明した、豆やイチジクの栽培を教えた、などである。また、牡馬に化けたポセイドンに犯され、恐るべき女神デスポイナや名馬アレイオンを生んだという話も伝承されている。
- 3) ここでペルセポネーが取り上げられ、しかもここにある種の奸計があったことを Jung がほのめかしている点は注目しておきたい(「親愛な読者は、この種の伝説は「偶然に」できたのではないということに、気づかれるであろう!」; 前掲書 231)。ここで示唆されているのは、母からもハーデスからも完全には従属しない立場を(自らザクロを口にするという行為によって)半ば意図的にとる娘が描かれているからである(少なくとも Jung は、この注を付けることによって、娘のそうした意図をほのめかしているものと思われる)。
- 4) 別のところで Neumann は「自己保存の段階では、本源的関係が優位を保っていて、男性的なものは道具ないし子どもとして従属しているに過ぎない。女性的な自我が自分を経験する限り、それは女性的、母親的なものであって、コレーはそのままデーメテルである」とも述べている。
- 5) このように、「エレウシスの秘儀」自体はデーメテルを讃える儀式であるが、ソクラテスがこの密儀の伝授を拒んだとされているのは興味深い。彼の拒否の理由は「メンバーになれば自分の舌を封じてしまうだろうと思っていた」(前掲書 120p) からだとされているが、デーメテルの母性的な魂の箝絡にたいして、雄弁家であり哲学者であるソクラテスは、一人の男性性の体現者として理性的哲学的思弁を守ろうとした、とも解釈できるからである。

- 6) 男性に備わっている女性性である「アニマ」に対応するものとして、本来女性に備わっている男性性。
- 7) ここで先述の Jung が提唱する娘の母親コンプレックスの在り方に関する類型において、c) の母親との同一化という方略が、優れて操作的な含みを持っていたことを想起されたい。
- 8) 分類という意味では、橋本 (2000) が紹介している Leonard (1993) の母娘関係の4分類は興味深い。①聖なる母 (Saint Mother) 自己犠牲的に尽くす母と、母の抑圧された怒りを背負う娘。②氷の女王 (Ice Queen) 冷たく支配的で完全主義的な母と、母に拒否され感情の表現ができない娘。③龍の女 (Dragon Lady) 攻撃的感情を爆発させ、怒りで娘を支配する母。④病気の母 (Sick Mother) 病気となることで娘をつなぎ止め、力をふるう母、である。これらは実際の事例で見られると共に、後述する Hirsh (1989/1992) が語る母娘物語のモチーフとしても出現する。
- 9) もっとも河合 (2003) は、アマテラスの天の戸伝説をデーメテル・コレー神話と「驚くほど類似性の高い」ものである、としている。

<文献>

- ・ Bachofen, J.J., (1861/1992) *Das Mutterrecht*. 佐藤信行・佐々木充・三浦淳・桑原聡訳『母権論』、三元社
- ・ Beauvoir, S. (1949/1997) *The Second Sex*. 井上たか子・木村信子監訳『第二の性 I 事実と神話』新潮社
- ・ Bolen, J.S. (1984/1990) *Goddesses in every woman: A new Psychology of Women*. 『女はみんな女神』村本詔司・村本邦子訳
- ・ Campbell, J. (1964/1985) 『神の仮面 (下)』山室静訳、青土社
- ・ Grant, M. & Hasel, J. (1973/1988) 『ギリシア・ローマ神話事典』西田実 (主幹) 入江和生・木宮直仁・中道子・西田実・丹羽隆子 (共訳)、大修館書店
- ・ Hall, M.P. (1962/1980) 『古代の密儀』大沼忠弘・山田耕士・吉村正和訳、人文書院
- ・ 橋本やよい (2000) 『母親の心理療法』日本評論社
- ・ Hillman, J. (1981) 『甦る神々』河合隼雄監訳、桑原知子・高石恭子共訳 (1991) 春秋社
- ・ Hirsh, M. (1989/1992) *The Mother/Daughter*. Plot: Narrative, Psychoanalysis, Feminism. Indiana University Press. 寺沢みづほ訳『母と娘の物語』紀伊国屋書店
- ・ 廣澤愛子 (2003) 「Anorexia nervosa に関する臨床心理学の一考察、愛知教育大学実践総合センター紀要第6号、pp.247-255
- ・ Jung, C.G. (1951/1983) 『続・元型論』林道義訳、紀伊国屋書店
- ・ Jung, C.G. (1938/1981) 『ユングの象徴論』野村美紀子訳、思索社
- ・ 河合隼雄 (1982) 『昔話と日本人の心』岩波書店
- ・ 河合隼雄 (2000) 『紫マンガラ』小学館 Wea
- ・ 河合隼雄 (2003) 『神話と日本人の心』岩波書店
- ・ 高津春繁 (1960) 『ギリシア・ローマ神話辞典』岩波書店
- ・ 國吉知子 (2015) 「母と娘—その光と闇」女性学評論第29号、pp.23-49
- ・ Neumann, E. (1953/1980) 『女性の深層』松代洋一・鎌田輝男訳 (1980) 紀伊国屋書店
- ・ 織田尚生 (1993) 『昔話と夢分析』創元社
- ・ 大森亜紀子 (2002) 「母娘関係における一体感と分離について」京都大学大学院研究科紀要 (48)、262-270
- ・ Qualls - Corbett, N. (1988/1998) 菅野信夫・高石恭子 (翻訳) 『聖娼』日本評論社
- ・ Rousseau, J.J. (1762/1962) *Émile, ou De l'éducation*. 今野一雄訳『エミール』岩波文庫
- ・ 千野美和子「日本説話「鉢かづき」にみる鉢の意味」京都光華女子大学短期大学部研究紀要 (54)、117-126
- ・ 高石浩一 (1997) 『母を支える娘たち』日本評論社
- ・ 高石浩一 (2019) 「母娘関係の来し方・行く末」京都文教大学心理臨床センター紀要 (21)、7-20
- ・ Walker, B.G., (1983/1988) *The Woman's Encyclopedia of Myths and Secrets*. 山下主一郎主幹、青木義孝、栗山啓一、塚野千晶、中名生登美子、山下主一郎共訳『神話・伝承事典』大修館書店
- ・ Westermarck (1891/1932) 『婚姻と離婚』青山道夫訳、改造社出版
- ・ やまだようこ (1988) 『私をつつむ母なるもの』有斐閣
- ・ 横山博 (1995) 『神話のなかの女たち』人文書院

Abstract

The Evolution of the Research of Mother-Daughter Relationships I: From the Viewpoint of Analytical Psychology

Koichi TAKAISHI

This paper introduces and treats some representative discussions on Mother-Daughter relationships mainly from the viewpoints of analytical psychology. The Greek myth of Demeter/Persephone is discussed by Jung, Neumann, and other researchers. And Japanese folk tale of Hachikazuki, famous as mother-daughter story, is discussed by Oda and some other Japanese Jung oriented researchers. The difference between Neumann and Oda's comments on the development of female consciousness suggests the diversity and multi-dimensions in women's life.

Key words : mother-daughter relationship, analytical psychology female consciousness

